

午後Ⅱ試験

全問に共通して、自らの体験に基づき設問に素直に答えている論述が多く、問題文に記載してあるプロセスや観点などを抜き出し、一般論と組み合わせただけの表面的な論述は少なかった。一方で、実施した事項をただ論述しただけにとどまり、実施した理由や検討の経緯が読み取れない論述も見受けられた。受験者自らが実際にシステムアーキテクトとして、検討し取り組んだことを具体的に論述してほしい。

問1（ユーザビリティを重視したユーザインタフェースの設計について）

ユーザビリティを高めるためのユーザインタフェース設計を具体的に論述することを期待した。ユーザインタフェース設計について具体的に論述しているものが多く、受験者がユーザインタフェース設計の経験を有していることがうかがわれた。一方で、利用者の特性や利用シーンが不明瞭、又はユーザビリティとの関係が薄い論述、ユーザビリティではなく機能の説明に終始しているものなども散見された。システムアーキテクトはユーザインタフェース設計において、要求にそのまま答えるだけでなく、利用者の立場に立って検討し提案することを心掛けてほしい。

問2（システム適格性確認テストの計画について）

立案したシステム適格性確認テストの計画を、業務の視点を交えて具体的に論述することを期待した。テストを効率的に実施するために、業務の視点からテストを分けたり、実行に際しての様々な配慮をしたりすることが想定される。多くの受験者が、商品・サービス・利用者・業務サイクルなどの業務の観点での分けと、その理由について具体的に論述していた。一方で、一部の受験者は、単体テストや結合テストなどのシステム適格性確認テストとは異なるテストの計画や、システム適格性確認テストの一部の実施だけを論述しており、システム適格性確認テストの理解と経験が不足していることがうかがわれた。システム適格性確認テストは、業務運用が可能かどうかを確認する重要なものである。システムアーキテクトは、情報システムと対象の業務の双方について正しく理解し、適切なテスト計画の立案を心掛けてほしい。

問3（組込みシステムのデバッグモニタ機能について）

開発・検証・出荷後の各段階で、各利用者から要求されるデバッグモニタ機能について、組込みシステムの特有の制約、セキュリティなどを考慮した上での具体的な論述を期待した。多くの論述は各段階での要求と対応内容に具体性があり、実際の経験に基づいて論述していることがうかがわれた。一方で、組込みシステムの特徴に乏しく、一般的な課題・解決策にとどまる論述、実装結果を説明しただけという論述も見受けられた。組込みシステムのシステムアーキテクトは、対象となる組込みシステムの特徴を理解して、適切なシステム設計ができるよう能力を高めてほしい。